

日本語発話の解釈：CMM 理論の日英通訳指導への応用

新崎隆子¹ 石黒弓美子¹

(東京外国語大学¹)

The purpose of this article is to propose an application of the Coordinated Management of Meaning (CMM) theory to the training of Japanese students in interpreting speeches in Japanese to English. We examined 429 samples of output in English produced by 38 participants, focusing on how they interpreted source speech before conversion. Our analysis has shown that the CMM Level s used by interpreters do affect their performance. It indicates that the application of the theory can help us in giving more specific and effective instruction in Japanese-to-English interpretation.

1. はじめに

本稿の目的は、日本語から英語への通訳(以下日英通訳とする)を指導する方法としてコミュニケーション理論の応用を提案することである。通訳のプロセスは、原発言の聞き取りと理解、起点言語から目標言語への変換、目標言語による伝達の三つの段階に分けることができる(ポエヒハッカー 2008; Hatim & Mason, 1997)。これを日英通訳の指導に当てはめると、各段階に必要とされる「日本語の解釈能力」「日英言語変換能力」「英語の運用能力」を育成することが目標となる。本稿はこれらの三つの能力育成を柱とする包括的な日英通訳指導研究のうち、「日本語の解釈能力」に焦点を当てて行われた研究の報告である。

日本では 1990 年代以降、通訳訓練法を一般の英語習得に役立てることを意図した教材開発が行われるようになり(篠田・新崎 1990; 田中 2004; 門田・玉井 2004)、原発言の意味の解釈をコミュニケーション理論の視点から取り上げた研究もあるが(渡部 2004)、それらは英語の聞き取りと理解に焦点が置かれている。

英日通訳に比べて日英通訳の研究は少なく、研究者は訳出する際の英語の表現力に注目し(小松 2001)、日英通訳教材の多くは英語のモデル訳を示すだけに留まり、日英通訳のプロセスに沿った具体的な指導の指針を示しているとは言えない。しかし、通訳のプロセスが原発言の理解から始まることを考えれば、日本語の解釈能力が日英通訳においてきわめて重要なことは言うまでもない。

本研究では、実証研究により、これまで取り上げられてこなかった通訳者の日本語解釈能力

と訳出の関係を明らかにしようとした。実際の通訳例を集め、CMM (Coordinated Management of Meaning、意味の協応調整)理論¹⁾に基づいて分析した結果、意味の解釈レベルが訳出の仕方と結びついていることが明らかになった。さらに、この理論を応用することにより、従来よりも具体的で効果的な日英通訳指導ができることが示唆された。

2. 原発言の意味の解釈

通訳や翻訳の指導では「学習者が『ことば』にひっかかって、意味を把握できない、または誤解をしてしまうことがある」ため(ベルジュロほか 2009)『『ことば』ではなく『意味』を目標言語で表現するように」という指示がなされるが、実際にどのようにすればよいかについての具体的な説明はされていない。「『言語表現を忘れて、意味に注意を集中して、それを訳出言語で自然に言いなさい」(ベルジュロほか 2009)、『この人はこういうことを言いたいんだな』ということを理解すること」(近藤 2009)、「複雑な意味を持つことばは様々な意味になること、文脈によって条件づけられていることを理解するように促す」(Nida, 1964)、「言語間の翻訳はある言語のメッセージを別の言語の個々のコード・ユニットで置き換えるのではなく、メッセージ全体で置き換えることである」(Jakobson, 1959)などの記述はいずれも曖昧で、学習者が使えるような意味解釈の方略につなげるのは難しい。

通訳理論の中では Danica Seleskovitch の唱えた「意味の理論」(Theory of Sense)が手ごかりになり得るだろう。セレスコビッチは“meaning”と区別された“sense”(意味)という概念を提唱し、通訳のプロセスを以下のように説明している。

Three steps to the interpretation process:

- 1) merging elements of linguistic meaning with extra-linguistic knowledge to obtain sense;
- 2) deverbalizing that sense as it emerges; and
- 3) spontaneously expressing this sense linguistically.

(Seleskovitch & Lederer, 1995, p.22)

セレスコビッチの通訳モデルによれば「意味」(sense)とは意識的なものである。発語の音身に喚起された言語的意味と認知的な付加要素から構想され、非言語的なものであり、訳出のプロセスは基本的にことばに拘束されない(ポエヒハッカー 2008)ということになる。「意味の理論」は「発話には『表層構造』と『意味』の二つのレベルがあり、『表層構造』の言語を単純に置き換えるだけでは『意味』を訳せないことがある」という多くの通訳者が通訳体験を通じて会得する経験知に合致する(近藤 2009, p.152)²⁾。しかし、通訳経験が乏しい、または全くない学習者が「意味の理論」の説明を聞いて、通訳経験により自然に会得されるものを想像することは難しい。したがって、「意味の理論」は通訳経験を重ねた者が共有する経験知を説明する上で有用と言えるかもしれないが、初学者の指導に応用する理論として有効なものとは言えない。

「ことばではなく、意味を訳しなさい」という際の「意味」とは原発話者の発話意図(発話行為)、Roman Jakobson の言う「コンテキストに基づくことばの指示的機能」(朝妻 2009)、さらに denotative な意味ではなく connotative な意味(語用論)と結びつく。Speech Act(発話行為)と

は John Austin が「発話はそれ自体、行為であり得る」として提唱した概念であり(橋内 1999) communicative intention と言い換えることができる(Yule, 1996)³⁾。その発話により行おうとする行為には apology, complaint, invitation, promise, request や通訳者が特に苦勞する joke や irony も含まれる。原発言の音声を正確に聞き取り、文章の文字通りの意味が分かって、発話の意図がつかめないうとき、目標言語への翻訳は難しくなる。例文1に示す発話の下線部分の発話行為は「表示」(representatives)、すなわち「真か偽かを判断され得る命題の提出」(橋内 1999, p.70)である。「教授は、教室の最前列の学生は目に入らず、中間か後ろの方に座っている学生に注目するので、一番賢い学生はいつも最前列に座った」という部分は文字通りの解釈ができる。しかしその後続く“The first row is almost empty”をその前と同じく「表示」だと解釈してしまうと、「最前列はほとんど空っぽです」という訳出になり矛盾を起こしてしまう。前の文では動詞が過去形であるのに対し、この文では現在形が使われていることに気づき、発話行為が「表示」から聞き手に対するユーモアに満ちた皮肉(irony)だと解釈できれば「今は、最前列に誰も座っていませんね」と発話意図を汲んだ訳出ができる⁴⁾。

例文 1: The smartest students of all sat in the first row. Why? Because when the professor lectured and would call on students, the professor would always focus on the middle or the end, always overlooking the first row.
The first row is almost empty.

通訳の指導においてはしばしば「背景知識」の重要性が強調されるが、これは発話の「意味」がコンテキストに応じて変わることには注意を促しているのである。橋内(1999)によれば、コンテキストには言語的なものと非言語的なものがあり、非言語的コンテキストには、媒体、コミュニケーション行動の種類、メッセージの内容、コミュニケーション行動の目的、状況、参加者、参加者同士の関係が含まれる。たとえば “We got a problem, because a governor failed” と聞いたときに、それが機械製造に関する技術会議(コミュニケーションの目的)で、技術者が技術者に対して行った発言(状況、参加者同士の関係)であるということが分かれば「知事が失敗したので問題が生じた」よりも「調整器が故障したため問題が生じた」の可能性が高いと推測できるだろう。また、ヤコブソンによれば、メッセージの聞き手は、「記号の一つひとつを個別に翻訳しながら理解するのではなく、話し手の発する音から意味へと全体を再構成し、「メッセージ全体」で理解に至る(朝妻 2009)。逐次通訳をする際は原発言を聞きながらメモを取らなければならないために、学習者は個別のメッセージ記号を強く意識する。そのために、発話の「意味」が記号ではなくメッセージ全体にあるという意識が薄くなり、一つひとつのことばにこだわる傾向が強くなるのかもしれない。

コミュニケーションのコンテキストやことばの含意に注意を払うことは、英日通訳にも必要だが、日英通訳の際に特に重要になる。Hall and Hall (1987)は、家族や友人、同僚など広範な情報ネットワークを持ち、緊密な人間関係を持つ日本は、ほとんどの情報がすでに既知のものであるために記号化する必要がない「ハイ・コンテキスト文化」であり、アメリカなど明示的な記号化が必要な「ロー・コンテキスト文化」と異なると述べている。それならば、日本語の発話は英語よりもコン

テキストに支配される部分が多い(井出 2006)ということになり、日英通訳の指導においては、明示的な記号に表れない発話の「意味」を把握する能力の育成が重要となる。

語用論の分野では発話の解釈について多くの研究が行われているが、通訳の実践に応用した研究は見当たらない。また、実務に関心がある通訳訓練の参加者に語用論の講義はなじまない。そこで、発話のコンテキストを踏まえた意味の解釈を分かりやすく指導するための手がかりを CMM 理論 (Coordinated Management of Meaning) に求めた。

3. CMM 理論(意味協応調整理論)

CMM 理論とは、1970 年代に米国の W. Barnett Pearce⁵⁾と Vernon Cronen が開発したコミュニケーション理論である。当時、米国では、公民権運動が高まりを見せる中、ベトナム戦争は末期を迎えて厭戦気分が蔓延し、社会的政治的混乱が続いていた。個人の自由と幸福の追求方法についても盛んな議論が行われ、「コミュニケーション」学におけるメタ諸理論が成熟した時代でもあった (Pearce, 2005)。

こうした不安定な時代にあって、研究者らは、談話や会話の *connotative* な意味を明らかにすることで、会話への参画者が彼ら自身が気づいていない発話の意味を認識し、自らの発話を協応調整してうまくコミュニケーションを成立させることができるよう支援することを目指していた。この理論は、コミュニケーションを行う人間は社会的ルールに照らしてメッセージを解釈し、生成し、相互に作用し合うものであるということを前提にしており(板場 2001)、その過程で発話の意味が協応調整 (*coordinated management*) されるとした。発話の協応調整とは、平たく言えば相手の真意を理解した上で、その真意を受け止めたことを相手に伝えるべく自分の発話を協応し (*coordinate*)、調整する (*manage*) ことである。CMM 理論は、当初、コミュニケーション事象を記述、解析する、主に個人間のコミュニケーションに焦点を当てた解釈理論として発展したが、様々なコミュニケーションの現場で事態を好転させる重要な強みを発揮するようになり、現在では各種現場で実務者に活用される実践理論に組み込まれるようになった (Pearce, 2005)。

CMM 理論で会話の解析に使用されるモデルには、Hierarchy Model、Serpentine Model、Daisy Model、LUUUUTT Model のようなモデルがあるが⁶⁾、通訳指導に有用と思われるのは階層モデルである。このモデルは、「発話の意味は文脈に左右される」という考え方と、「コミュニケーション行為は常に複数の文脈において発生する」という理解から始まっている (Pearce, 2005)。即ち、人の発話には、実際に発話で使用された語や語の組み合わせと声のトーンなどの生の音声データとそれが表現する明示的意味だけでなく、誰が誰に向かって、どのような状況下で、どのような文化的枠組みの中で、どのような意図を持って発したのかなどによって、理解すべき複数の意味の階層があり、各々の階層を理解して初めて発話内容の真の理解が可能になるとした理論である。また、表1に示すような諸階層の意味の理解に基づき、発話の表現や内容を協応調整することで、コミュニケーションの円滑化を図ることを目的として開発された実践理論である。

表 1. 人の発話にみる諸階層

CMM 理論の応用で使用される階層の数や順序は固定化されたものではなく、それぞれの場面において適切な階層が設定される。階層を並べる順序も固定しているものではなく、場面に応じて可変である。例えば、Pearce 等が使用した 2 例を見ると、階層が固定していないことがよくわかる。

まず、最初の事例は、1993 年 2 月に発生したニューヨーク世界貿易センタービル爆破事件の裁判であるが、裁判長が被告に「最後に言いたいことはないか」と尋ねたのに対し、被告がアメリカこそテロリストだと食ってかかる。裁判官は反省のみじんも見られない被告に逆上し、被告はアラールを冒瀆する悪魔であると断じて、厳刑を言い渡す。この裁判官と被告のコミュニケーションの破綻について、Pearce は CMM 分析事例 1. に示すような階層分析を行っている。

CMM 分析事例 1. 文脈的意味以上の階層 (Pearce 2004, pp.41-42)⁷⁾

	裁判官	被告	
下位層	関係	被告は悪であり、伝染病の病原ウィルスをまき散らし、自らの宗教哲学を裏切っている存在との認識を持つ。	自らの犯罪の犠牲者は眼中にない。アメリカ政府は対峙すべき殺し屋、偽善者である。
	自己観	自分は裁判官であり、法の番人である。正義をなすべき代理人である。	自分はテロリストではあるが、アメリカとイスラエル相手のテロリストであるのは本望だ。
	出来事	法によって定められ、注意深く進められてきた刑事裁判という法的手続きの最終段階、量刑の段階。	世界最悪のテロリストであるにもかかわらず、他をテロリストとして非難する偽善者（アメリカ）の存在。
上位層	文化	言語表現されないが、法治と人道的倫理に基づく強力な道徳観。	言語表現されないが、国際的に抑圧されていると感じているムスリムとしての強力な道徳観と義務感。

ここでの裁判官と被告のコミュニケーションに最も影響を与えていると分析された意味の階層は「文化」である。次の階層は「出来事」で、文化的背景と出来事によって、無意識のうちに二人の言動がコントロールされ、互いに対立する構図になっていたとの分析である。次の階層は「自己観」で、4 つめの階層は他者との「関係」である。二人のコミュニケーションに最も影響を与えた層、すなわち上位二つの階層とされた文脈の中で、「自分は法の番人である。正義をなすべき代理人である」との強い自己意識を持った裁判官は、自分のテリトリーである法廷で、アメリカこそが「偽善的、世界最悪のテロリストである」と見る被告のふてぶてしい発言と不敵な態度に出会ったとき、その心情を逆なでされて、厳刑の言い渡しへと突っ走ってしまったと、全体像が分析されている。

二つ目の事例は、Pearce の属していた Loyola University Chicago の一行が、エルサルバドルの University of Central America を訪問した時の事例である。こちらは、双方が CMM (意味の協応調整) を実行したことで、異文化間コミュニケーションがいかに支障なく成立したかを、先の実例と同じ 4 つの階層を使いながらも、異なる順序、すなわち、最上位階層を「出来事」とし、「人間関係」「自己」「文化」の順に並べて、コミュニケーションの成功例の分析を解説した。以上みたように、CMM 理論の階層モデルでは、階層の数や重要度の順序は固定されたものではなく、その時の状況、条件によって可変である。

CMM 理論とは、もともと、こうした人間関係の改善や異文化理解の促進を目指すコミュニケーションの改善ツールとして開発されたものであるが、通訳訓練においては、意味の解釈の重要性を説明するのに有用である。通訳スキルの指導においてよく言われる「言葉ではなく、意味を取る」には、具体的にどう指導したらよいかを示してくれるのがこの意味の階層的分析である。

では、発話の意味の解釈において、階層的意味分析とは、いかなるものであるのか、発話を文脈レベルや文化レベルで理解するとはどのようなことなのかを見てみよう。あるレストランで、客がレジ係に領収書を求めた。通常のごとくレジ係は客に「お名前様は」と尋ねた。これに対し、客も「上で結構です」とよくある返事を返した。ところが、客が受け取った領収書の宛名欄には、カタカナで「ウエ」と書かれていた。この出来事は CMM の階層モデルで分析事例2のように分析することができる。

CMM 分析事例 2. 階層モデルを用いた発話の分析

Level 1. 音声	うえでけっこうです。
Level 2. 内容	うえと書けばよい。
Level 3. 文脈的意味	宛名欄に「上」と書いてほしい。
Level 4. 発話行為	名前の書き方を指示、あるいは要求している。
Level 5. 話者の意図	宛名欄に自分の本名を書く必要はないと伝える。
Level 6. 文化	「上様」と書くというのが普通。

レジ係は、レベル 1、2 を理解し、レベル 4 も理解していたが、レベル 5、6 の理解が欠如していたために、「うえ」は客の名前だと受け取った。5、6 の理解が成立しなかったため、レベル 3 の

文脈的意味の解釈もできなかった。その上、名前「うえ」の漢字が特定できなかったので、カタカナで客の名前を「ウエ」と宛名欄に書いたのである。

以上の事例は、コミュニケーションの場においていかに意味の階層理解が重要であることを示している。通訳という営みも、コミュニケーション・イベントである。しかも、一対一、あるいは一集団対一集団という二者間のコミュニケーションであるばかりでなく、異言語間コミュニケーションを必要とする A と B という二者がいたならば、その間に立って、A の言語、文化を理解して、A とも、仲介者である通訳者とも、文化や言語の異なる B にも分かるように A の発言を伝え、その逆も行う役目を担うのが通訳者である。通訳を介したコミュニケーションでは、通訳者の意味の理解が互いの言語を理解しない二者のコミュニケーションの成立を左右するのであれば、通訳者による正しい発話の意味の理解は重要度を増す。CMM 理論を応用することで、これまで以上に具体的に効果的な日英通訳指導が可能となれば、通訳者の技能向上に資することができるだろう。

4. 研究方法

日本語から英語への逐次通訳の実験的調査を行い、実際の訳出例に見られる原発言の解釈を CMM 理論に基づいて分析した。調査に用いた原発言は、特定のテーマに沿ったスピーチにおける自発的発言である。発言者はあらかじめ用意した原稿を読むのではなく、その場でことばを選びながら話している。テーマは地球環境、社会福祉、イスラム研究、ジャーナリズムの 4 種類である。調査参加者は、少なくとも 1 年以上の専門的な通訳訓練を受け、およそ 1 年から 25 年以上の実務経験を持つ 38 人である。参加者には逐次通訳指導の向上を目的とする研究にデータが使用されることを伝え、同意を得た。

調査は 2011 年 4 月から 2012 年の 3 月にかけて行った。4 つのスピーチの音声を数十秒程度の長さで区切ったものを用意し、調査者の監督のもとに、一回に数名ずつが一斉に逐次通訳を行い、録音した音声を書き起こした。一区切りの逐次通訳を 1 サンプルと数え、429 サンプルを収集した。その内、原発言を「生の音声データ」(レベル 1)と「メッセージの内容」(レベル 2)まで、正確に理解していると思われる訳出例を選び、CMM 理論の意味の階層モデルに従って分析した。

5. 調査の結果

逐次通訳データを分析した結果、事実の記述のように原発言の意味が明瞭な表示文の場合には、意味の解釈について参加者間のばらつきはほとんど見られなかった。

例文 2: (中野区は)、面積が 4 平方キロメートルに 18 万世帯っていうから、相当密集地なんですから。人口は 31 万。

訳出の差は、主に英語運用能力の違い(数字の変換、平方キロメートルの訳出、文章が迅速に組み立てられないことによる言い淀み)によるものだった。しかし、曖昧な文については、高いレベルの意味の協応調整が行われているかどうか、話者の意図やコンテキストに依存する意味の理解を促し、「文脈的意味」の把握による的確な訳出を導いていると思われた。そこで、訳出

例を「文脈的意味」(レベル 3)以上の解釈の違いにより(1)「訳出が通訳者によって異なっている」、(2)「『メッセージの内容』の一部を訳出していない」、(3)「『メッセージの内容』のレベルで訳出しようとして、不自然な訳出、訳出の遅れ、言い淀み、言い直し、訳文の破たんが起きている」、(4)「原発言を誤解し、誤訳をしている」の 4 つに分けて分析した。訳出文は読みやすくするために(3)以外は言い淀みなどの音声的特徴を割愛した。

5.1 解釈の違いにより、訳出が通訳者によって異なっている。

例文 3: 仕事というのはどういう効果があるのかなということですがけれども...

通訳者 6: You may ask what is the benefit of having a job for those disadvantaged?

通訳者 18: What is impact... or the good effect of the... the work for the disabled people.

通訳者 26: What are the benefits being brought about by working?

通訳者 6 は「効果」を「障害者にとっての仕事の効用」と解釈し、「効果があるのかな」を疑問文として解釈・処理した。「ということですがけれども」の部分も CMM を行っている。通訳者 18 は「効果」を同じく「障害者にとっての仕事の効用」と解釈したが、発話行為を疑問の提示と理解し、「ということですがけれども」のニュアンスは省略した。通訳者 26 は「一般に人にとって仕事を持つことの効用は何であるか」と解釈し、疑問文として訳出した。

例文 4: そこで私は以前から Social Inclusion、社会との...社会的包摂、これを日本の中でもっと強調していかなければいけないんじゃないかなという風に思っております。

通訳者 1: I have always from the past been emphasizing the need for social inclusion in Japan. I feel the need that there is a need to emphasize more on the social inclusion.

通訳者 23: Therefore ah from the past, I've been advocating the concept of the social inclusion. I think that the focus should be placed on this concept.

通訳者 27: For these reasons I have been focusing on sending out a message to that about the importance of the emphasis on the social inclusion in Japan.

通訳者 1 は「社会包摂」を「行為」と解釈し、「以前から」を「以前から強調してきた」と理解した。また「強調して行かなければならないんじゃないかという風に」を「強調する必要性を感じる」と解釈した。通訳者 23 は「社会包摂」を「概念」として理解し、「以前から」を「以前から提唱してきた」と解釈した。また「強調して行かなければ...」を、「集中的に注意を向けるべき」と訳出している。通訳者 27 は「社会包摂」を「その重要性を強調してメッセージとして発信するべきもの」と理解し、「以前から」は「以前から重要なメッセージとして社会包摂を訴えることに注力してきた」と解釈した。3 人は原発言の意味の協応調整を行っているが、調整の仕方の違いが異なる訳出を生みだしている。

例文 5: そういうその矛盾というのに解を出さないと、今の環境問題っていうのが...の本質に企業が参加できない。

通訳者 6: Unless we get answers to those questions, businesses cannot really join in the effort to solve environmental problems in earnest.

通訳者 36: So we have to find an answer to this contradiction. If we cannot, then companies cannot respond to the essence of environmental issues.

この発言が行われた状況(レベル 4)は「企業が環境問題解決に取り組むための条件を示す」、さらに、その上の話者の意図(レベル 5)は「エコテクノロジーを開発しても家庭のエネルギー消費が下がらない矛盾と企業の取り組みの関係を示唆する」ことであるが、通訳者 36 には、このレベルまでの理解はなく、レベル 2(メッセージの内容)で解釈し「この矛盾の答えを見つけない限り、企業は本気で環境問題を解決する努力に参加できない」と訳出した。一方、通訳者 6 は、レベル 4, 5 までの理解を踏まえて、「この疑問に対する答えを見つけない限り、企業は本気で環境問題を解決する努力に参加できない」と訳出した。即ち、文脈的意味を引き出すことに成功していると言える。

以上のように、調査では、通訳者によってレベル 2 以上の意味の協応調整にばらつきがあり、それが訳出の違いをもたらしていることが明らかになった。

5.2 「メッセージの内容」の一部を訳出していない。

通訳者は効果的かつ適切な意味の伝達に不要であると判断した原発言の箇所を省いて訳出することがある。これは、記憶できない、または訳出できないなどの技術的な理由によるものとは区別する必要がある。このような「訳出する箇所」の選択も意味の協応調整により行われる。

例文 7: 中野区は典型的な住宅街じゃない、山の奥の方の。

3 人が “This is not located in a mountainous area”(通訳者 8)のように直訳したが、他の 16 人は訳出しなかった。

例文 8: ムハンマドという存在は一言で言えば、って、まあ二行に書いちゃいましたけど、まあ血筋のいい、生粋のアラブ人だった訳ですね。...

この発話の下線の部分は、スピーカーが聴衆に配布していた資料に記されていたムハンマドの人物像についての記述が 2 行にわたって書いてある点に触れた部分である。この部分は、調査対象とした通訳者 10 人全員が省いて訳出をしていた。

例文 9: ...あのここに書きました「ラー・イラーハ・イッラッラー」、「アッラーの他に神なし」とまあ一神教ですから、そういう事になりますけども、それから「ムハンマド・ラスールッラー」、「ムハンマドはアッラーの使徒なり」と。

この下線部については、通訳者 10 人のうち、3 人はカタカナ読みで読み上げたが、2 人はそれを行おうとしたもののうまくできず、途中で挫折し、残りの 5 人は、最初から省いて通訳を行った。これらの箇所を省いた通訳者は、意味の協応調整によって、「省いても原発言の内容を十分かつ適切に伝えることができる」或いは「省いた方が聴衆にとってわかりやすい」との判断で省いたと解釈できる。

5.3 「メッセージの内容」のレベルで訳出しようとして、不自然な訳出、訳出の遅れ、言い淀み、言い直し、訳文の破たんが起きている。

例文 9: 一つはあの、えー「契約」っていうのがあると思うんですね。これ「唯一神との契約」。

通訳者 18: The first one is contract with ,ah,... only God ah..... It is a monotheisis... monotheism. And believers are ah... ah... kind of a person who has a contract.

この部分は、イスラム教の特徴を説明しているところで、この例文の文脈的意味は「イスラム教の特徴の一つは、信者が唯一神と契約を結ぶことを求められることである」ということであるが、通訳者 18 は、レベル 2 以上の意味の協応調整をせず、「契約」「唯一神との契約」ということばから直接英語に置き換えようとして上手くいかずに著しく言い淀み、言い直して誤訳になり文も破綻した。

例文 10: (... 社会とのつながりが無い、また孤独死にしても社会とのつながりが無い) まあ究極はですね、高齢者の所在不明事件ではないでしょうか。

通訳者 1: And to ultimately speak about this, erm the ultimate example of such a case might be those er er people at a very high age being lost.

通訳者 6: And extreme cases of this nature are found in the elderly persons whose whereabouts are unknown to families and friends for a long time.

通訳者 20: ...the... the most severe reason is unidentified aged... p... aged ah people. These issues are... exist in the Japanese society.

通訳者 25: ... or erm most recently we had people the elderly people who... do not exist in... in real life.

通訳者 1、20、25、の例に見られるように、20 人中 15 人に言い淀み、訳出の遅れ、不自然な訳出、訳出文の破たんが見られた。これは「高齢者の所在不明事件」を直訳しようとしたためだと思われる。一方、通訳者 6 の訳出では、話者の意図が「人々のつながりが希薄になっていることについて問題提起をすること」にあり、その極端な例として高齢者の所在不明事件に言及していることを汲み取った解釈がなされている。

以上の例は、状況や話者の意図などの高いレベルの意味調整を怠り、「メッセージの内容」から直ぐに訳出に結び付けようとするのが、訳出の選択肢の幅を狭め、言い淀みや不自然な表現の原因になることを示している。意味の協応調整が原発言の解釈のみならず、日英変換方略

や英語の運用能力にも関連している可能性が窺われる。

5.4 「文脈的意味」より上のレベルで意味の協応調整をせず、原発言を誤解し、誤訳をしている。

例文 11: エアコンはこの 10 年間で 40 パーセントも省エネになっている。

通訳者 22: For example, as for the air-conditioning, in the past ten years, 40% of the air-conditioning became eco-friendly products.

通訳者 26: For instance, during the past ten years, energy efficiency of air conditioners has improved by 40 percent,

通訳者 33: The energy consumption of air-conditioning has gone down by 40%.

「エアコンが 40 パーセント省エネになった」に対して「エアコン総数の 40 パーセントが省エネ型になった」(通訳者 22)、「エアコンのエネルギー効率が 40 パーセント向上した」(通訳者 26)、「エアコンのエネルギー消費量が 40 パーセント減少した」(通訳者 33)の 3通りの解釈が見られた。「メッセージの内容」のレベルであればどの解釈も可能だが、原発言者が電気製品の省エネが進んでいることを納得させるために(意図)その具体例を示していること(状況)を考えれば、文脈的意味は「効率が 40 パーセント向上した」となる。通訳者 22 の解釈では、60 パーセントが従来型の製品だということになり、通訳者 33 の解釈では、人々がエアコンの使用を控えたという意味を含むため、省エネ化が進んでいることを伝えようとする原発言者の意図に反する訳出になっている。

例文 12: (あらゆるものがエコになって生活者も環境というのを考える) そうすると環境負荷っていうのは良くならなければいけないのに(家庭のエネルギー消費量は減らない)。

通訳者 28: What that means is that our environment should be better, the burden on the environment should be better.

通訳者 34: When this is happening, we should think that the environment burden should be lessened.

“the burden on the environment should be better” (通訳者 28)の誤訳は「環境負荷が良くなる」という「メッセージの内容」レベルで解釈したことによる。原発言者が環境意識の高まりが効果を表していない事例を導こうとしている状況を理解して意味の協応調整をすれば「環境負荷は減るはずだ」(通訳者 34)という文脈的意味が容易に導けるはずである。

例文 13: で、あくまでやっぱり、その、神との契約は1人1人の事だっという考えあります。だからイスラームには、あの、信仰の事はやっぱり本人の問題でしかないんだ、っという考えも非常に強くありますね。

通訳者 2: ...so there is a strong opinion that this religion is very personal.

通訳者 15: And the Islam can be considered personal affair.

このスピーチが行われた背景には、2001年9月11日にアメリカで発生したイスラム教徒による同時多発テロ事件以来、日本でもイスラム教に対する負のイメージが強くなっており、イスラム教が誤解されることが少なくないという主催者の現状認識がある。その中で、原発言者は「イスラムの世界でもイスラム教を信じるかどうか、神と契約を結ぶかどうかは個人が決めるべきことだと考えられている」つまり「イスラム教でも個人の信仰の自由が認められている」ということを強調して伝えようとしているが、ここで挙げた通訳者は2人とも、話者の意図と社会的背景を踏まえた意味の協応調整ができなかった。文脈の意味も把握せずに、「非常に強くある」という部分と「1人1人」「本人の問題でしかない」ということばから、直接、英語に置き換えようとした結果、通訳者2は、「イスラム教が非常に個人的な宗教だ」という強い意見がある」と誤訳し、通訳者15は、「イスラム教が個人的な問題だと考えられる」と誤訳している。

例文 14:このような職場では障害者を1.8パーセント雇用しなければならなくなっています。

通訳者 23: We must hire the disabled up to the 1.8% of the overall work force.

通訳者 9: We are obliged to employ more than 1.8% of handicapped people.

この例文の文脈的意味は「民間企業は、全従業員の1.8%は、障害者を雇わなければならない」という法的数量割当て規定がある」で、障害者雇用のコンテキストや法定雇用義務を果たす企業が少ないことを伝えようとする原発言者の意図を踏まえた意味協応調整ができれば容易に解釈できる。ひとつの民間企業が、障害者総人口の1.8%を雇うことは不可能であり、通訳者9の訳出は誤訳である。

以上のように、通訳事例をCMM理論の意味の階層モデルに従って分析した結果、通訳者が原発言を意味のどのレベルで解釈するかが訳出の仕方や正確さに深く関係していることが示唆された。次節では、この調査結果に基づき、日英通訳指導に役立つ指針を考察する。

6. 考察

今回の調査から、通訳者が原発言を主体的に解釈し、訳出を行っていることが明らかになった。原発言の解釈は通訳プロセスの起点であり、その後の訳出を左右する。音声(レベル1)の聞き取りとメッセージの内容(レベル2)の把握ができて、原発言を正しく解釈できるとは限らない。また、通訳を単純なことばの置き換えと考えレベル2を超える意味の協応調整の必要性を自覚しなければ、誤訳や訳出の破たんをきたす可能性がある。原発言を的確に解釈する力を育成するためには、階層の意味が瞬時に把握できるよう、学習者に、その判断の基礎となる背景知識や情報の蓄積を促すとともに、文脈的意味の把握を指導する必要がある。

通訳をするためには翻訳の能力が不可欠である。解釈に続く言語変換の段階には、翻訳技法を援用できるだろう。しかし、今回焦点を当てた原発言の解釈については、これまで、翻訳と通訳は理解のメカニズムにおいて全く同じであるとされ、通訳特有の問題が指摘されてこなかった(北林ほか 1998, pp.205-2010)。今回の調査結果に基づき、通訳における原発言の解釈に

については以下のような視点からの指導が必要だと思われる。

(1) 原発言が必ずしも、確定的なことばや文で表現されていない。

自発的な発言は意味が明示的でなく曖昧なことが多く、無意味な発言や言い間違いもあり得る⁸⁾。特に日本語の場合はその傾向が強い。今回の調査で使用した以下の例文は、ありふれた自発的発言だが、英語に通訳をしようとする、いかにあいまいな表現の羅列であるかがわかる。

例文 15: 一昨日私のところへですねスワンベーカーの社長をしている海津さんが来てくれました。㊦彼と話しているとですね、いやあ、㊧障がい者が働いて一番いいことって何ですかというふうに言うそうですね、

通常ここにある下線㊦と㊧を聞いた場合、聞き手は、㊦は「私が社長と話をしているとき」という意味に解釈し、㊧の部分は、相手の社長の発言であると予測するのではないだろうか。ところが、㊧の後には「というふうに言うそうですね」という発言が続いている。つまり㊧の部分も、まだここでの話者の発言なのである。

この部分の通訳をしようとする、まず㊦の下線部分をそのまま “When I was talking with him” と訳出したくなるが、そうすると次の句も、“I said to him” あるいは “I asked him” と続けざるを得ず、不自然な英文になる、または後半の句が訳し難くなる。ある程度の経験のある通訳者なら、㊦は訳出せず、㊧だけを訳出するだろう。しかし、その場合も原発言の意味は曖昧で、後の文を聞かなければ、話者が何を言いたいのかはっきりとは分からない。調査対象とした通訳者の訳にも、以下に見るような差異が見られた。原発言が曖昧であるために、通訳者間で、この部分の原発言の解釈が異なっていることを示している。

通訳者 6: I asked him what was the greatest benefit for them to have a job.

通訳者 18: I asked him what is a good point of making disabled people work.

通訳者 19: what is the most advantage thing for disabled people to work.

この個所には「障害者の人たちが言うのはですね、お客さんに喜んでもらえる、自分たちの仕事に感謝してもらえる、それが一番うれしいと彼らは言っていたよというふうに教えてくれました」という発言が続く。ここまで聞いて初めて、㊧の意味は、「障害のある人が働くことで、彼らにとって一番良いことは何か」と社長に聞いたのであり、通訳者 18 の訳例に見るような「障害者を働かせることの(たとえば会社にとっての)利点」を聞いたのではないことがわかる。

このような日本語の使い方は、珍しいものではなく、むしろ日本語の口語表現の特徴とも言うべきであろう。翻訳の場合は、文学作品、技術文書、放送用原稿など、どのジャンルのものでも原文は完成され確定しているが、通訳者が扱う原発言は完全なものではない。ことばの使い方が未確定で、内容もコミュニケーションの相互作用を通じて変化する。通訳者は翻訳者よりもはるかに柔軟に原発言の意味の解釈を行わなければならない。CMM 理論は、意味の階層という

手がかりを与えることでそのような完成度の低い発話の解釈に役立つと考えられる。

(2) 日本語の発言はコンテキストへの依存度が高く、同じメッセージの内容でも、誰が誰に対してどのような場面で発するかによって意味が変わる。

コンテキストへの依存度が高い原発言の通訳では、意味の解釈能力が試される。

例文 16:そこで私は以前から **Social Inclusion**、社会との・・社会的包摂、これを日本の中でもっと強調していかなければいけないんじゃないかなという風に思っております。その中ですね、一番役立つのが今申しました仕事ということなんです。

下線の「その中で」の意味は明示されないが、前の文から「社会包摂という概念の実現を推進する中で」を指すことが推察される。さらに、このスピーチが社会福祉というコンテキストで行われ、福祉関係者のコミュニティでは「社会包摂」が「弱者を社会に受け入れること」を意味すること、また、話者が障害者の雇用推進の重要性を強調していることなどを把握して初めて意味の協応調整が可能になり、下線部分は「障害者など就労において課題を持つ人たちに仕事を提供することが社会包摂の推進に一番役に立つ」と解釈できる。

このように日本語の自発的発言は極めてあいまいで文脈への依存度が高いことが多く、前後の情報や、誰が誰に語っているのか、スピーカーや聴衆を取り巻く現状がどのようになっているのかなど、より深い文脈の理解なしに正しく解釈することは難しい。そして、文脈的意味の理解には、句や節、文の単位のみならず発話全体のコンテキストを含めた意味の階層を把握することが不可欠である。

(3) 通訳は翻訳に比べて、意味の解釈と訳語の選択をはるかに短時間で行わなければならない。

ポエヒハッカー(2008:5)は通訳とは<翻訳>の一形態であり、異言語での最初にして最後の訳が、起点言語における発話の一回限りの提示を基に産出されると述べている。同時通訳はもちろんのこと、逐次通訳であっても、瞬時に文脈的意味の解釈ができなければ、スピーカーと息のあった、スピーディで適切な通訳を行うことはできない。長い時間をかけて正確で完成された訳出を行うことを目指す翻訳を指導する方法を通訳に適用するのには限界があると考えべきである。

すなわち、通訳は翻訳よりも原発言の意味解釈について、はるかに迅速で柔軟な対応を求められると言える。特に、極めてコンテキストへの依存度が高い日本語による発言を外国語に通訳する際には、原発言の解釈能力が通訳の質を決めると言っても過言ではない。今回の調査では、通訳者の意味解釈に差異があることや、意味の協応調整ができていないために、誤訳や不自然な訳出、訳文の破綻、訳出の出遅れや言い淀みを生じた事例が見られた。

通訳者の養成では「ことばではなく、意味を取って訳すようにしなければならない」「背景知識が大切である」のような指示が与えられてきたが、それが具体的にどういうことなのかを明確に説明する方法が示されてこなかった。次節では今回の調査から見出された日英通訳指導につい

ての新たなアプローチを提案する。

7. 日英通訳における原発言の解釈に関する指導の提案

本研究の結果に基づき、日英通訳指導のうち、日本語の原発言の意味の解釈について、以下のようなアプローチを提案する。

- a. 発話の意味には階層構造があることを説明する。
音声とメッセージの聞き取りさえできれば通訳できるという誤解を解く。
母語による原発言であっても必ずしも正しく解釈できるわけではないことを教える。
- b. 翻訳との違いを説明する。
通訳における原発言はコンテキストへの依存度が高く、意味が曖昧なことが多いため、より柔軟な解釈能力が必要であることを説明する。
- c. 模範通訳例は、原発言の書き起こしを翻訳したものではなく、音声を聞いて実際に行った通訳を基にして作成する。
翻訳した訳例は、通訳のプロセスで産出されるものの手本にはならない。
- d. 日本語原発言の大意把握をさせる。
意味の協応調整をせず L.2 で訳出しようとするのが、誤訳や訳出の破たんを引き起こす原因になるため、大意把握により L.2 から離れることを学習させることができる。
- e. ニュースのように文やことばの意味が明示的である教材に偏らず、意味の曖昧な自発的発言を教材とする。
意味の解釈の力を養うには、理解のプロセスで意味の協応調整を要する教材を使用する必要がある。

8. 結論

日英通訳指導法に関する研究の一環として、通訳者による日本語原発言の解釈を経験的データによって調べた結果、意味の解釈レベルが英語への訳出に影響を与えていることが確認された。話者の意図や発話の背景、人間関係などを含む、より上のレベルの意味の協応調整をすることが的確な解釈を引き出している。これまでも、原発言の表層的なことばではなく、発話の意味を考えて訳出をするように促す指導は行われてきたが、CMM 理論を用いることで、より具体的で分かりやすい説明ができると考える。今後は、日英通訳に必要な「日英言語変換能力」および「英語の運用能力」に焦点を当てた研究を行い、総合的な日英通訳指導法を提案したい。

【著者紹介】

新崎隆子 (SHINZAKI Ryuko) 放送・会議通訳者。博士(国際コミュニケーション)。東京外国語大学大学院非常勤講師。著書に『通訳席から世界が見える』(2001) 筑摩書房などがある。

石黒弓美子 (ISHIGURO Yumiko) 放送・会議通訳者。東京外国語大学非常勤講師。共著に『改訂新版通訳教本 英語通訳への道』(2007) 大修館書店、他がある。

【註】

1. 日本語訳は板場(2001)による。
2. 「意味の理論」については「脱言語化された意味(sense)があり得るか」という疑問や、原発言が客観的な叙述のときは、脱言語化された意味(sense)を介さずに、変換規則による自動的処理で目標言語に訳出できるという指摘がある。(水野 1997)。
3. In attempting to express themselves, people do not only produce utterances containing grammatical structures and words, they perform actions via those utterances. (Yule, 1996, p.47)。
4. 英語の“irony”はしばしば人を面白がらせる動機で用いられるのに対し、日本語の「皮肉」は相手への非難や批評する気持ちで用いられる。「皮肉」に当たる英語は“sarcasm”のニュアンスに近い(池上 2006)。
5. W. Barnett Pearce は非営利団体 Pearce Associates を創設し、CMM 理論の普及や地域、組織などにおけるコミュニケーションの円滑化に取り組んでいる。[Online]
http://www.pearceassociates.com/pearce_associates.htm (Pearce Associates) (2012/02/26.)
6. CMM 理論のモデルは以下のように説明されている。
Hierarchy Model: コンテキストの複数の層を包括的に考慮する。
Serpentine Model: 二者間の会話の流れを分析し、特定の転換点(相互理解のきっかけ)を見出す。
Daisy Model: 発話に含まれる複数の視点を明らかにする。
LUUUUTT Model (stories Lived, Unknown, Untold, Unheard, Untellable stories, stories Told, and story Telling): 影に隠れている物語を強調する。
7. 和訳及び編集は石黒による。
8. 複数回の推敲を経て作成される公式な演説や宣言文などを前もって訳出し、本番で読みあげる場合は「通訳」ではなく「翻訳」と考えるべきである。

【参考文献】

- Hall, E. T., & Hall, M. R. (1987). *Hidden Differences: Doing Business with the Japanese*. New York, NY.: Anchor Press/Doubleday & Company.
- Hatim, B., & Mason, I. (1997). *The Translator as Communicator*. London: Routledge.
- Jakobson, R. (1959). *On Linguistic Aspects of Translation*. R. A. Brower (Ed.), *On Translation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 232-239. Reprinted in L. Venuti, (Ed.), *The Translation Studies Reader*. London & New York: Routledge, 2000. 113-118. (邦訳「翻訳の言語学的側面について」川本茂雄(監修)(1973)『一般言語学』みすず書房 56-64.)
- Nida, E.A. (1964). *Toward a Science of Translating*. Leiden: E.J.Brill.
- Pearce, W. B. (2005). *The Coordinated Management of Meaning (CMM). Theorizing about intercultural communication*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Pearce Associates. http://www.pearceassociates.com/pearce_associates.htm (2012/02/26.)
- Seleskovitch, D. & Lederer, M. (1995). *A systematic approach to teaching interpretation*. Luxembourg: The Office for Official Publications of the European Communities. (Original work

published 1989).

Yule, G. (1996). *Pragmatics*. Oxford: Oxford Press.

朝妻恵理子 (2009)「ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論」『スラブ研究』No.56 [Online]
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic-studies/56/08asazuma.pdf>

2012年7月25日

ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔(2009)『よくわかる逐次通訳』東京外国語大学出版会

橋内武(1999)『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版

井出祥子(2006)『わかまえの語用論』大修館書店

池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚 <ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会

板場良久(2001)「線形理論としての直線型モデルと円環型モデル」石井敏・久米昭元・遠山淳(編)
『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』(pp.57-63) 有斐閣

門田修平・玉井健(2004)『決定版 英語シャドーイング』コスモピア

北林利治・杉山泰・ボナン, R.・西村友美(1998)『初めて学ぶ翻訳と通訳—言語コミュニケーション入門』松柏社

小松達也(2001)「日英逐次通訳の分析—試論」『通訳研究』1号 日本通訳学会

近藤正臣(2009)『通訳者のしごと』岩波書店.

水野的(1997)「『意味の理論』の批判と通訳モデル」『通訳理論研究』7巻1号

ジェレミー・マンデイ(2009)『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳) みすず書房

ポエヒハッカー, F. (2008)『通訳学入門』(鳥飼玖美子監訳) みすず書房

篠田顕子・新崎隆子(1990)『今日からあなたの英語は変わる』NHK 出版

田中深雪(2004)『英語リスニングの「基礎トレ」 プロに教わる秘密のメニュー』講談社インターナショナル

渡部富栄(2004)「事例から見た通訳者の語用論アプローチ」『通訳研究』4号 日本通訳学会

